真庭市埋蔵文化財調査報告１

定４・５号墳確認調査報告

２００７

真庭市教育委員会

序

定古墳群は、古墳時代の終わり頃に中津井川の右岸に築かれた特徴的な古墳群です。それらは段構造の方墳といわれるもので、他に類例の少ない特徴的な構造をもっています。周辺には頭椎大刀が出土した土井2号墳や双龍環頭大刀が出土した大谷1号墳が所在し、古墳時代後期以降、この周辺は注目すべき地域であるといえます。

このたび、真庭市教育委員会では、すでに岡山大学考古学研究室によって発掘調査が行われた定東塚・西塚古墳、定北古墳以外に、その内容が不明であった定4・5号墳に着目し、その築造時期と性格を解明するために、平成18年6月から発掘調査を実施しました。

調査の結果、定東塚古墳に始まる定古墳群の築造が、定北古墳以後に引き続き行われていたことが明らかとなりました。このことは、大谷1号墳との関係を考える上で貴重な資料を提供することができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護・保存に対する理解を深めるうえで、広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、地権者および地元の方々をはじめ関係各位から、多大なご協力をいただきました。ここに、厚くお礼申しあげます。

平成19年3月

真庭市教育委員会

教育長　大倉　貢

例　言

1　本書は、真庭市教育委員会が実施した、岡山県真庭市上中津井70-1および35に所在する定4・5号墳の確認調査報告書である。

2　確認調査は、坂田　崇・新谷俊典が担当し、池上　博が補佐した。

3　調査にあたっては、現地に於いて亀田修一氏・白石　純氏(岡山理科大学)、和田　剛氏(岡山県古代吉備文化財センター)、西田和浩氏(岡山市教育委員会)のご教示を得た。また　下記の方々から多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

新納　泉(岡山大学)、津田智祥、山口二郎、中嶋治喜(順不同、敬称略)

4　本書の執筆は、次のように分担した。

第1章、第2章第1節：池上

第2章第2節、第3章第2節、第4章第2節：坂田

第3章第1節、第4章第1・3節：新谷

なお、編集は3者で協議しおこなった。

5　遺構・遺物の写真は坂田・新谷が担当した。また、調査前の地形測量は有限会社ナラサキシビルエンジニアに委託し実施した。

6　出土遺物・図面・写真等は、真庭市教育委員会(真庭市落合垂水1901-5)に保管している。

凡　例

1　本書で用いた高度は海抜高である。また、地形図等の座標値は旧座標である。方位はすべて真北である。

2　第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「皆部」「井倉」を複製・加筆したものである。

本文目次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　周辺の地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　発掘調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の経過

第３章　発掘調査の概要
　第１節　４号墳
　　1　立地および調査区の設定・・・・・・・・・・・・・・・4
　　2　墳丘の構造・・・・・・・・・・・・・・・5
　　3　石　室・・・・・・・・・・・・・・・10
　　4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２節　５号墳
　　1　立地および調査区の設定・・・・・・・・・・・・・・・12
　　2　墳丘および周溝・・・・・・・・・・・・・・・13
　　3　列　石・・・・・・・・・・・・・・・13
　　4　規模・形態および構築方法・・・・・・・・・・・・・・・18
　　5　横穴式石室・・・・・・・・・・・・・・・18
　　6　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・20

第４章　まとめ
　第１節　定４号墳の年代的位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・21
　第２節　定５号墳の年代的位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・22
　第３節　「大谷・定古墳群」における定４・５号墳の歴史的位置づけ・・・・・・・・・・・23

挿図目次

第１図　真庭市位置図
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）
第３図　４号墳周辺地形および調査区位置図（1/200）
第４図　墳丘平面図（1/60）
第５図　列石立面図（1/60）
第６図　墳丘断面図(1)（1/40）
第７図　墳丘断面図(2)（1/40）
第８図　石室実測図（1/40）
第９図　出土鉄製品（1/4）
第10図　５号墳周辺地形および調査区位置図（1/200）
第11図　検出遺構図（1/80）
第12図　各トレンチ土層断面図(1)（1/40）
第13図　各トレンチ土層断面図（2）（1/40）
第14図　南東トレンチ列石平面図、立面図および断面図（1/40）
第15図　石室実測図および遺物出土状況（1/40）
第16図　出土須恵器（1/4）
第17図　定４号墳の築造規格案（1/100）

図版目次

図版１－１　定４・５号墳所在地遠景（西から）
　　－２　４号墳調査前状況（南から）
図版２－１　調査後全景（南から）
　　－２　前面トレンチ（西側）列石検出状況（南から）
図版３－１　西トレンチ列石検出状況（南西から）
　　－２　南西隅トレンチ列石検出状況（東から）
図版４－１　北トレンチ（北西から）
　　－２　石室調査前全景（南から）
図版５－１　石室調査後全景（南から）
　　－２　鉄製品出土状況（南から）
図版６－１　５号墳調査前状況（南から）
　　－２　調査後全景（南から）
図版７－１　北トレンチ（南から）
　　－２　東トレンチ北壁墳丘盛土断面（南から）
図版８－１　南東トレンチ列石検出状況（南から）
　　－２　南東トレンチ列石検出状況（東から）
図版９－１　石室全景（南から）
　　－２　石室内須恵器出土状況（南から）
図版10－１　４号墳出土鉄製品
　　－２　５号墳出土須恵器

第1章　周辺の地理的・歴史的環境

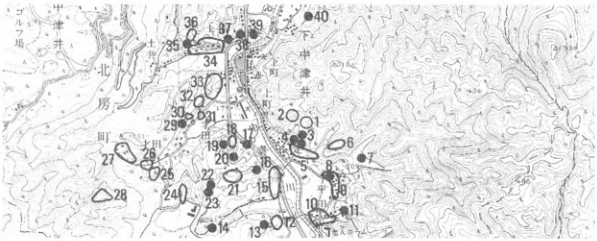
岡山県真庭市は、平成16年3月に真庭郡8ヶ町村と上房郡北房町が合併して誕生した。合併後の面積は岡山県下最大となり、域内の大半が山林である典型的な中山間地域である。旧北房町地域は、真庭市の南西部に位置し、高梁・新見の両市に隣接している。旭川の支流である備中川水系が形成した沖積地を中心に発展してきた。このため、旧備中国に属してはいるが、歴史的には落合地区など美作地域との結びつきが強い。

この地域では、今のところ旧石器時代の遺構・遺物は未発見である。縄文時代の遺跡としては、備中平遺跡[1]・空遺跡[2]・谷尻遺跡[3]・桃山遺跡[4]・地蔵ヶ渕遺跡[5]などがあげられる。このうち、備中平遺跡・空遺跡・谷尻遺跡などでは楕円文や山形文の押型文土器が出土し、現状では最古の遺跡である。洞窟遺跡としては、晩期の土器が出土した地蔵ヶ渕遺跡がある。また、谷尻遺跡では晩期の打製石斧が比較的まとまって出土しており注目される。しかし、いずれも少量の遺物が出土したのみで、大規模な集落の形成は認められない。

弥生時代になると、前期段階ではほとんど遺跡・遺物とも認められないが、後期段階では地域全域に遺跡が広がる。中小河川流域の丘陵上や段丘上にまで小規模な集落が認められる。このうち、拠点的な集落の一つである谷尻遺跡では、畿内(播磨)系の土器が多量に出土しており、人的な移動なども想定される。このほか、特殊な遺跡として、祭祀遺跡である矢の内遺跡[6]などもある。

古墳時代に入ると、上木田地域に最古の前方後方墳と考えられる荒木山東塚[7]が築造され、以後、荒木山西塚[8]、そふづぶう古墳[9]、立1号墳[10]の首長墳が継続的に築造される。これらの大型の前方後円(方)墳は、英賀郡に相当する地域を掌握していた首長と考えられているが、5世紀後半には立1号墳を最後に大型前方後円(方)墳は見られなくなる。一方、西に隣接する呰部地区には6世紀前半と考えられる全長32mの前方後方墳である小田鼻古墳[11]が築造され、首長墳の築造地域が移動しており、なんらかの政治的変動を想定する根拠とされる。その後6世紀後半に入ると古墳の築造数は飛躍的に増大する。なかでも6世紀後葉になると下村古墳[12]など、県北有数の規模の横穴式石室を有する円墳が築かれる。また、土井2号墳[13]などでは頭椎大刀が出土しており注目される。7世紀になると中津井地区に、備中川の支流である中津井川流域に特徴的な終末期古墳が築かれる。いずれも段構造の方墳で、7世紀前葉に定東塚・西塚古墳[14]が築かれるが、墳丘は定型化されていない。ついで7世紀中葉には同じ尾根上方に定北古墳[15]が築かれ、段構造の方墳として完成する。大谷1号墳[16]のみ位置が伝統的な地域を離れ、対岸の谷最奥部の丘陵斜面に築かれており、このことから旧来の首長と

第1図　真庭市位置図(●印：遺跡位置)



第2図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

はいささか出自の異なる人物が埋葬された可能性も指摘されている。また、上水田地区では7世紀末には英賀廃寺[17]が創建され、備中式の軒丸瓦が出土しており英賀郡衙と推定されている小殿遺跡[18]があるなど、大谷1号墳・定古墳群との関係を考えるうえで重要である。

註

(1)井上　弘ほか「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

(2)田仲満男「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976

(3)高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976

(4)「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

(5)平井　勝「原始古代社会と文化」『北房町史』通史編上　1992

(6)(7)(8)(9)註5文献

(10)近藤義郎・尾上元規「立1号・2号墳」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』7　1998

(11)(12)註5文献

(13)平井　勝「十井2号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』29　岡山県教育委員会　1979

(14)新納　泉・光本　順『定東塚・西塚古墳』　北房町教育委員会　2001

(15)新納　泉・尾上元規『定北古墳』　北房町教育委員会　1995

(16)近藤義郎・河本　清「大谷1号墳」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』7　1998

(17)平井　勝「小殿遺跡(英賀郡衙推定地)・英賀廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』38　岡山県教育委員会　1980

(18)註17文献

第2章　発掘調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

1988(昭和63)年、北房町史編纂のため北房町所在主要遺跡調査団により大谷1号墳の発掘調査が実施され、3段築成の墳丘部と前面2段の方形壇から成る方墳というほとんど類例のない古墳であることが判明した。その後、1990(平成2)年から岡山大学考古学研究室により定古墳群をめぐる一連の調査が実施され、当該地域におけるこれらの特異な首長墳の変遷を捉えることができた。

これを受け北房町では、歴史的資源を町づくりに生かす内容の「西の明日香村構想」を策定し、大谷1号墳を含む上中津井から上水田地域にわたる史跡回廊の整備に着手した。また同時に、大谷1号墳・定東塚・西塚古墳・定北古墳という主要な4基の終末期古墳の史跡指定について関係機関と協議してきた。しかし、遺跡の価値は高く評価されるものの、史跡指定後の維持・管理について当時の町の体制における不備が指摘され、当面町側の対応待ちということになった。

その後、平成17年3月に真庭郡8ヶ町村と北房町が合併し真庭市が発足し、それに伴い文化財専門職員が配置されたことにより遺跡保護の体制が充実し、あらためて真庭市として史跡指定を目指すこととなった。

このため、定古墳群全体の歴史的位置づけが必要となったが、4・5号墳についてはこれまで発掘調査の対象とされず詳細が不明であったため、判断が留保されてきた。今回、定4・5号墳の歴史的位置づけおよびその性格を明らかとするために発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

発掘調査は真庭市教育委員会が調査主体者となって、2006(平成18)年6月19日から9月28日までの期間、実働56日を要し4号墳・5号墳ともに並行して実施した。

調査方針は古墳の規模および基本構造を把握することに主眼を置き、必要最小限の発掘にとどめる調査とした。調査区は基本的に、両墳ともに石室を中心として東西・南北のトレンチを十字形に設定し、列石の構造等を把握するためのトレンチは必要に応じ適宜、拡張・設定した。

なお、両墳とも石室内および列石周辺からの排土はすべて篩にかけ、微細遺物の検出に努めた。

調査の体制については、以下のとおりである。

調査主体者　真庭市教育委員会

事務局　真庭市教育委員会

教育長　大倉　貿

教育総務課長　美甘宗章　総括参事　三船光夫

調査担当者　主幹　池上　博　主査　坂田　崇　上級主事　新谷俊典

作業員　生田敏幸　池田智恵子　岩藤敏昭　太田博文　須藤　弘　津田悦子　(50音順)

第3章　発掘調査の概要

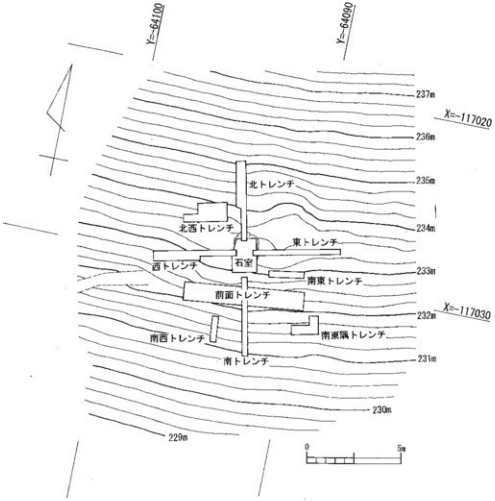
第1節　4号墳

1　立地および調査区の設定(第3図)

定4号墳は、定古墳群中で最も小規模な古墳である。中津井川に向け西に延びる丘陵の南斜面に派生する尾根上に所在し、石室周辺で標高約233mを測る。同じ尾根の下方に所在する定北占墳とは約18m、丘陵裾に所在する定東塚・西塚古墳とは約40mの比高差を測る。

調査前の時点で、墳丘の盛土はかなり流出しており、墳形は明確ではなかった。岡山大学考古学研究室が実施した測量調査の際には、その成果および露出した列石の一部やボーリング棒による探査も考慮して、東西約6m、南北約4.8m、2列の列石を有す方墳の可能性が想定されていた。[1]

調査は古墳の規模・構造の把握を目的とし8箇所のトレンチを当初設定し、調査の進展に伴い、墳丘の南側にも列石が存在することが予測されたため南東隅、南西の2トレンチを追加設定した(第3図)。また、石室の遺存状況を確認するために、東西、南北それぞれの方向に幅10cmのトレンチを石室内に設定した。調査面積は約18.5㎡である。



第3図　4号墳周辺地形および調査区位置図 (1/200)

2　墳丘の構造

外護列石（第4・5図）

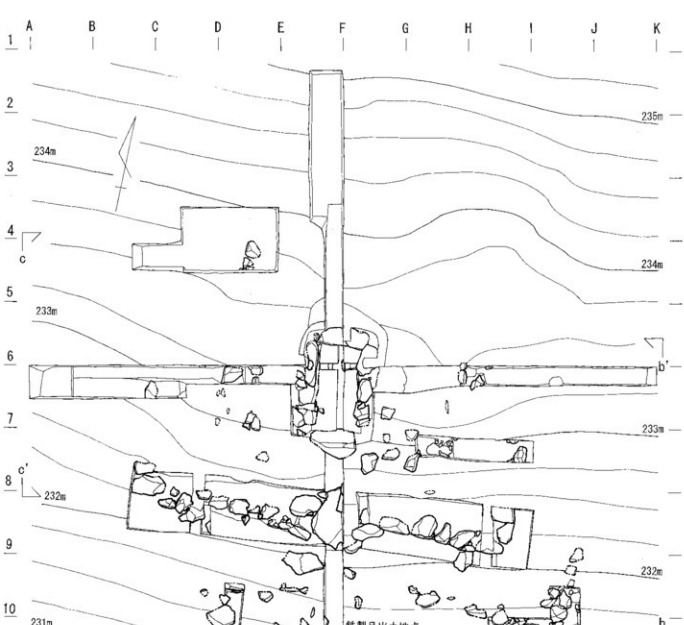
墳丘前面を中心に3列の外護列石を確認できた。最下段を第1列石、中段を第2列石、最上段を第3列石と呼称し、各列石の検出状況について述べる。

第1列石は、墳丘前面に設けられた基壇状施設に伴う列石であり、南東隅、南西の2トレンチで検出した。南東隅トレンチでは列石の南東角が確認でき、南辺から5°とわずかに東に開くかたちで北に延びている。トレンチ北側の地表に露出する列石の延長線上をボーリング棒で探査したが、石材は確認できなかったため、東辺はこの部分で途切れる蓋然性が高い。この場合、東辺は長さ約1.35mとなる。20～40cm大の礫岩を中心に基本的に1段であるが、南東角では角を意識してかゝ緩やかに2段積みとなる。南辺では標高231.8m前後に列石の上面が揃うようである。確認できた範囲では、列石の前面が直線状に揃わず、平滑面を有す石材も存在しない粗雑な造りである。東辺は北側に向け徐々に高さが増し、最も北側に露出する列石上面のレベルは、第2列石の南東角とほぼ同じレベルを測る。石の据え方については、南東隅トレンチでは表土を除去した段階で調査を終了したため不明であり、南西トレンチでも置き土あるいは掘り方は確認できなかった。

第2列石は、墳端を区画する列石として位置付けられ、前面、西、南東の3トレンチで検出した。前面トレンチでは南東・南西の両角が確認でき、これを結んだ南辺は5.97mを測る。東辺、西辺は南辺端部から北に直角に延び、南東トレンチ、西トレンチにそれぞれ達する。これら各辺は真北を基準とする四方と一致する。東トレンチ、北西トレンチではこの延長で列石が検出されておらず、この部分までは列石が巡らないものと想定できる。前面トレンチ東半部では、列石が一部2段積みの状態で確認できた。1段目は35～55cm大の4石の礫岩が面を揃えて直線状に並んでいる。2段目は赤色泥岩を含む25～40cm大の3個の石材が検出されたが、遺存状況は良くない。第2列石の残存高は最大で約45cmとなり、1段目の基底面は東端では標高約231.9m、西端では約232.1mを測る。前面トレンチ西半部で検出された石材の大部分は、本来列石の2段目を構成していた石材が崩れ南側に押し出されたものである。原位置を保つ1段目は南西隅およびFラインから50cm西側の2箇所で確認しており、この間の列石は崩落した2段目の下位に残存すると思われる。西トレンチ、南東トレンチで確認された列石は1段で、石材はトレンチ壁にかかっているため正確な大きさは不明だが30～40cm前後と思われる。南辺の石材に比して扁平で平滑な面を有さない。石の据え方については、前面トレンチ東半部に設定した2箇所のサブトレンチ断面で掘り方が確認できたが、前面トレンチ西半部および西トレンチでは確認できなかった。また、南東トレンチでは置き土をして列石が据えられている。

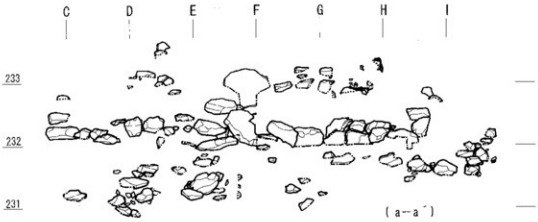
第3列石は、墳丘1段目と2段目を区画する列石であり、東、西、南東、北西の4トレンチで検出した。列石の角は確認できなかったが、南東トレンチの西部分が南東角にほぼ位置する。各トレンチでの検出状況およびボーリング棒による探査から、列石は石室開口部からはじまり、東西幅約3.7mを測るものと想定される。北西トレンチで検出した列石の周辺には抜け跡等が確認できなかったため、西辺はここで途切れると思われる。10～30cm大の石材を1段に並べるが、南東トレンチでの検出状況を考慮すると一部は2段積みにしていたと思われる。東西両辺とも平滑な外面を揃えるように据えられている。石の据え方については、各トレンチで掘り方が確認でき、列石の下部は墳丘に埋まっていたと考えられる。

以上、3列の外護列石についてその様相を述べたが、これら列石の共通要素として、①南辺を主体



第4図　墳丘平面図（1/60）

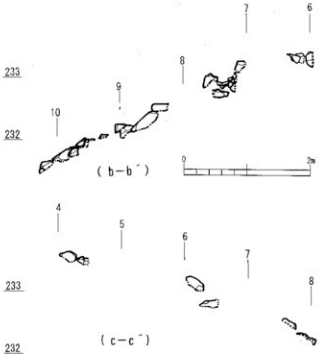
に築かれ平面形でコの字状を呈し、墳丘を全周しない、②第2列石で画された墳丘の主軸は真北に一致し、各列石とも真北を基準とした四方に合わせて築かれている、③東辺、西辺では北側にいくに従い列石のレベルが上がる、④第2列石の前面を除き基本的に1段である、⑤石材は礫岩を主体とし、わずかに他石材を使用する、といったことが挙げられる。こうした要素から、列石の構築にあたっては、真北を基準とする方位や古墳の正面観が重視される一方で、側面の列石は簡素な構造にとどまり、背面にいたっては列石が構築されないといった状況が看取される。



なお、定北古墳や大谷1号墳の事例を勘案すれば、天井石を覆う墳丘上面に4列目の列石が存在した可能性もあるが、それを示す遺構や転石は検出していない。

形態と構築法(第6・7図)

古墳の形態は、墳丘北辺の両角が確認できていないため、方墳のほか前面観が方形を呈す不整多角形墳の可能性も考えられる。しかし、北トレンチで確認された墳端が第2列石南辺から約5.6mを測り南辺の長さ約6mに近似すること、北西トレンチの全面で墳丘を構成する十層が確認されていること、第3列石の検出状況を考慮すると、4号墳の墳形は方墳であったと判断できる。



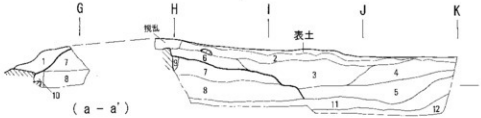
第5図　列石立面図 (1/60)

(b−b´、c−c´については側面の列石のみ実測)

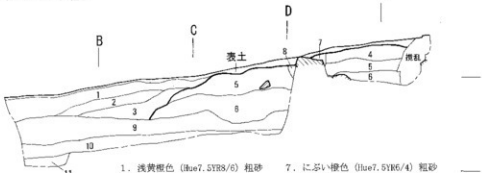
古墳の規模は、墳端を示す第2列石を基準にすると、現状で東西約6m、南北約5.6m、高さ約2.2mとなる。前面基壇状施設を区画する第1列石を含めた場合、検出状況から東西約8.3m、南北約6.6mの規模に復元され、高さは現状で約2.6mを測る。

次に、各トレンチの土層断面の観察に基づいて想定される墳丘の構築方法について述べる。[2]

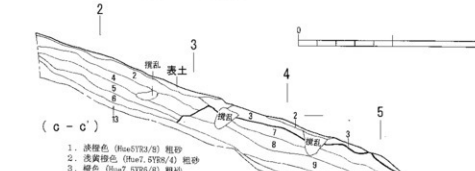
まず、4号墳の北半を中心とする部分は、盛土をせず旧地形を削り出して構築されたと想定される。その理由として、①墳丘を構成する十層の特徴が類似し、明確な差異を認めがたい、②北トレンチ(第6図 c—c')では墳丘の土層(7～10層)が南側に傾斜し、基盤層(13層)と同様の傾向を有する、③墳丘外側では東トレンチの地山(第6図 a—a'11層)や北トレンチの基盤層(第6図 c—c'13層)などが掘削されているが、尾根からの墳丘の切り離しとしては不明瞭である、⑤北西トレンチでは基盤層(第7図 e—e'4層)を整形して墳丘が作り出されている、といったことが挙げられる。また、石室墓壙の掘り



1．にぶい黄褐色（Hue10YR7/4）粗砂
2．にぶい黄褐色（Hue10YR7/4）粗砂
3．橙色（Hue7.5YR7/6）粗砂
4．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂（褐色ブロック混）
5．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
6．淡橙色（Hue5YR8/3）粗砂
7．橙色（Hue7.5YR7/6）粗砂
8．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
9．にぶい褐色（Hue7.5YR5/4）粗砂
10．にぶい橙色（Hue7.5YR7/4）粗砂
11．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
12．にぶい橙色（Hue2.5YR6/4）



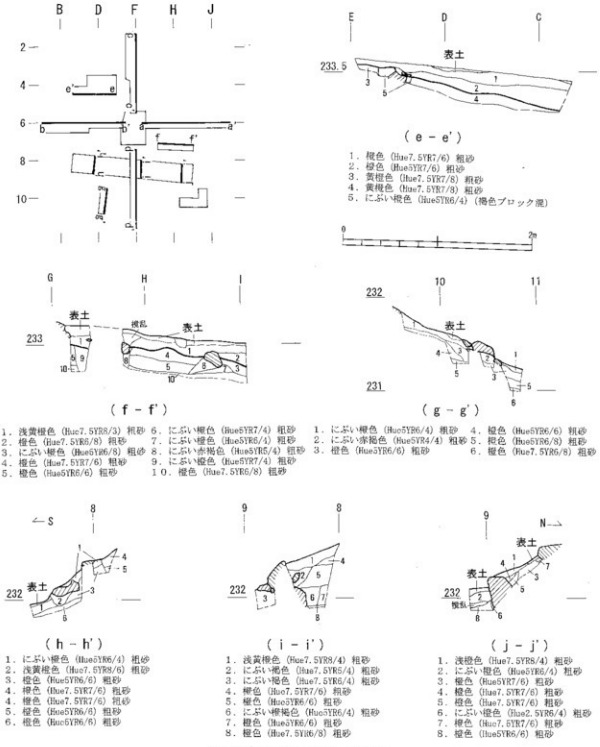
1．浅黄橙色（Hue7.5YR8/6）粗砂
2．橙色（Hue5YR6/8）粗砂
3．にぶい橙色（Hue5YR4/6）粗砂
4．黄橙色（Hue7.5YR7/8）粗砂
5．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
6．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
7．にぶい橙色（Hue7.5YR6/4）粗砂
8．にぶい橙色（Hue7.5YR6/4）粗砂（褐色ブロック混）
9．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
10．淡赤橙色（Hue2.5YR7/3）粗砂
11．淡赤橙色（Hue2.5YR7/3）粗砂



1．淡橙色（Hue5YR3/8）粗砂
2．浅黄橙色（Hue7.5YR8/4）粗砂
3．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
4．橙色（Hue7.5YR7/6）粗砂
5．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
6．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
7．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
8．黄橙色（Hue7.5YR7/8）粗砂
9．橙色粗砂（Hue7.5YR7/8）粗砂
10．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂
11．橙色粗砂（Hue7.5YR7/6）粗砂
12．橙色（Hue7.5YR7/6）粗砂（褐色ブロック混）
13．橙色（Hue7.5YR6/6）粗砂

1．浅黄橙色（Hue7.5YR8/4）粗砂
2．にぶい褐色（Hue7.5YR5/4）粗砂
3．にぶい橙色（Hue5YR6/4）粗砂
4．橙色（Hue5YR6/6）粗砂
5．橙色（Hue5YR6/8）粗砂
6．褐色（Hue7.5YR4/3）粗砂
7．明褐色（Hue7.5YR5/6）粗砂
8．橙色（Hue5YR6/6）粗砂
9．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂
10．橙色（Hue7.5YR6/8）粗砂

第6図　墳丘断面図(1)（1/40）



第7図　墳丘断面図(2)（1/40）

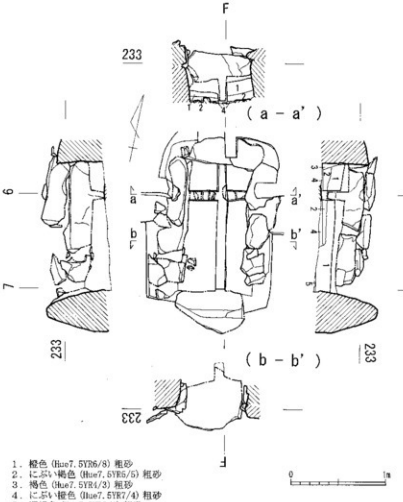
方(第6図 a—a' 10層、c—c' 11・12層)が石室の壁面上部とほぼ同じレベルまで確認されており、いったん盛土をしたうえで墓坑を掘削したと考えるより、旧地形を利用して墳丘が構築されたことに起因すると考えるのが妥当であろう。ただし、南東トレンチ(第7図　f—f')では、第2列石が置き土(6・7層)をして設置され、その後盛土(3～5層)がおこなわれている。また、既に失われている天井石より上位の墳頂部分を築くにあたっても盛土が使用されたと想定される。

列石と墳丘の関係については、東・西・北西の3トレンチにおいては旧地形を削り出し墳丘を整形するのと平行して、掘り方を掘って据えられたものと思われる。南東トレンチにおいては第2列石を

境として東西で異なる盛土が認められたが、狭小な範囲での確認ということもあり、墳丘の造成と列石の設置に関する構築順序を検討するに至らなかった。

一方で、墳丘の前面および第1列石で区画される基壇状施設については、旧地形を地山まで掘削した上で盛土をして墳丘が構築されている。南トレンチ(第6図 d—d')では、南側に傾斜する地山(9層)がまず掘削される。地山は石室開口部に近いトレンチ北端と9ラインでは約65cmの比高を測り、この部分を掘削して整形した後、南北約1.7mの範囲にわたって盛土(8層)がおこなわれる。さらに、前面トレンチ中央のサブトレンチ断面(第7図 i－i')では、その盛土を掘り込んで第2列石が据えられた状況が確認でき(6層)、最後に墳丘の盛土がおこなわれたようである(4・5層)。南トレンチの10ライン付近では、盛土(8層)の南端および地山(9層)が南北約40cm間で比高差50cmを測る急斜をなしている。第1列石により区画される墳丘前面の基壇状施設の構築に伴うかたちで、旧地形を段状に整形した可能性も想定できるが、この箇所のみでの確認のため確実性に欠ける。

なお、石室前庭部については、石室開口部付近が撹乱されているため、南トレンチおよび前面トレンチの調査では、その存在を確認できなかった。また、墳丘の盛土が版築状を呈する箇所も確認できなかった。



第8図　石室実測図 (1/40)

3　石　室(第8図)

石室は南に開口する無袖の横穴式石室である。天井石は取り除かれ、壁面の2段目および開口部付近の側壁も破壊を受けていた。調査前は石室内に約20～30cmの堆積土があり、天井石とおぼしき割石状に面を整形した礫岩が1枚内部に転落していた。また墳丘周辺にも天井石が2枚散在していた。

主軸はN5°Wで、真北を採る墳丘主軸からわずかに西に振れる。現状で全長1.3m、奥壁側の幅0.66m、開口部側の幅0.67m、平面形でおおむね2：1の長方形を呈する。ただし奥壁と側壁のなす角度は直角ではなく、ややいびつな形状である。高さは、現状で床面から東壁0.5m、西壁0.66m

奥壁0.57mが最大値となる。壁面上面は標高で東壁233.15m、西壁233.25m、奥壁233.13mと近似した数値を示し、後述する閉塞石が233.23mを測るのとあわせ、標高約233.2m前後が本来の石室高と想定され、現状と大きくは違わないと推測される。

側壁は現状では2段積みで構成されるが、本来の石室高を考慮すると、一部3段積みであったり、天井石との間隙を充填するため2段目の上部に小形の石材を積み上げていた可能性が高い。石材はいずれも横位に積まれている。基底石は両側壁とも2石で構成され、長さ約30～100cmを測る。高さは、トレンチを入れた箇所で床面から東壁39cm、西壁43cmを測る。2段目は東壁で3石、西壁で1石が遺存していた。東壁は長さ約30～40cm、高さ約10～15cm、西壁は長さ約75cm、高さ30cmの大きさを測る。2段目上面付近には10cm大の石材が3石あり、これらの石材が間隙を充填するために使用されていたとみられる。奥壁は2段積みである。基底石は1石から成り、長さ76cm、高さ54cmを測る。2段目は破壊を受け、1石のみ遺存し、長さ約35cm、高さ12cmを測る。いずれの壁面も割石の平滑面を内側に向け目地を通すように積まれており、石材は礫岩が大半を占めるほか、石灰岩が西壁基底石に、赤色泥岩が東壁開口部側の基底石および間隙を充填するための小形の石材に用いられている。

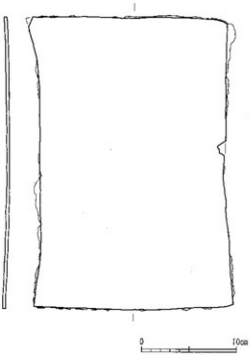
石室内に設定したトレンチではにぶい橙色を呈する床面が検出できた。床面からは東西トレンチを中心に10～15cm大の石材が数石確認され、うち両側壁から2つ目の石材は他より大形で上面のレベルがやや高く、棺台に使用された可能性もある。開口部に近い南側では攪乱に伴い床面が失われているが、攪乱後の堆積土下位から非常にしまった明褐色土層が検出された。墳丘から基盤層あるいは地山まで墓壙を掘削したのち、その底面を整地するため盛られたものと考えられる。

石室開口部には幅72cm、高さ68cmの石灰岩の閉塞石が確認された。攪乱後の堆積土中に含まれており、当初は開口部を塞ぐかたちで設置されていたが、攪乱に伴って若干移動したものと判断した。

4　出土遺物(第9図)

遺物は、南トレンチの墳丘外側、10-11ラインの間で鉄板状の不明鉄製品が1点出土した。長さ32cm、幅20cm、厚さ0.3cmを測る。鍛造品で端部に向けて若干撥状に広がる。刃部は作出されておらず、鋲や穿孔を施した痕跡も見当たらない。この鉄製品の用途および時期について判断する手掛かりは乏しいが、掘削された地山上面に張り付くような状態で出土しており、4号墳の築造時期と時間的隔絶を大きく経ない可能性もある。

なお、石室トレンチ内の埋土、南トレンチおよび前面トレンチの攪乱に伴うと考えられる堆積土の調査排土は全て篩にかけたが、遺物は確認できなかった。



第9図　出土鉄製品 (1/4)

註

(1)小嶋善邦「第3章 周辺古墳の調査　2 定4号墳」

新納　泉・尾上元規編『定北古墳』 岡山大学考古学研究室　1995年

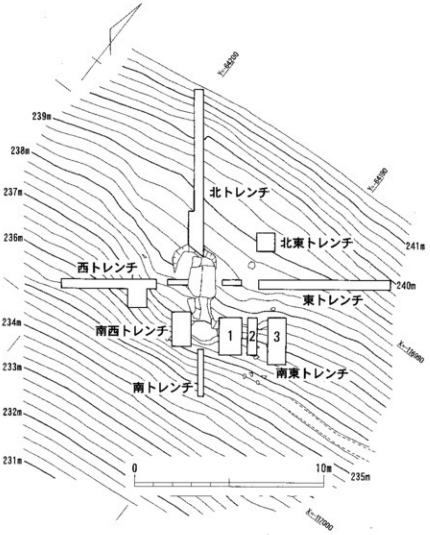
(2)墳丘の構築法を検討するにあたっては、新納　泉、和田　剛の両氏から貴重なご教示をいただいた。

第2節　5号墳

1　立地および調査区の設定(第10図)

いわゆる定古墳群は、下中津井の定集落を見下ろす小山塊から南へ派生する尾根上に比較的集中する形で所在している。5号墳は古墳群中最も奥側で最も高所の場所にあり、4号墳から北西約100mに位置している。古墳は南西に向けて傾斜する斜面上で南東に主軸を置く形で築かれており、背後は尾根の頂部にかなり近い。現地表面上において、古墳築造の際におこなわれた整地のラインが巡っている状況を観察することができる。標高は石室の天井石上面で238.5mあり、定集落周辺の平地との比高差は約58mを測る。古墳前面側は下方への傾斜が著しく、特に前面南西部については列石等遺構の遺存状況が著しくよくない。

調査区は基本的に、石室を中心として南北・東西方向に幅30cmのトレンチを十字形に設定したが、調査の進行過程で土層観察および遺構検出のため50cmまで拡張した(東・西・南・北トレンチ)。また、列石の状況確認のため別途トレンチを設定し調査した（南東1～3・南西・北東トレンチ）。調査



第10図　5号墳周辺地形および調査区位置図（1/200）

面積は約21.6㎡である。

墳丘は調査の結果、方墳であることが判明した。列石は墳端から第1列石、第2列石と呼称し、また各列石の石は、下から1段目、2段目と呼ぶこととする。

なお、以下の記述で単に「中心」と表記した場合には、東西・南北トレンチの基準線交点のことを指す。

2　墳丘および周溝(第11・12・13図)

5号墳は従来から天井石が露出し、列石と思われる礫が地表面上でも確認されていたことから、横穴式石室の方墳と認識されてきた。調査の進行につれ、墳丘背後の周溝についてもその様相を把握することができた。

整地の掘り方については東トレンチおよび北トレンチにおいて検出、確認することができた。両トレンチともに、中心から約7mで掘り方の上端を検出した。このことから、14m四方以上の範囲で整地がおこなわれたと考えられる。東トレンチでは約40cmの深さに掘り下げ、中心に向かって概ね水平となっているが、北トレンチでは本来の地形が急傾斜となっているためか、約3mの長さにわたり約2.3mの深さで2段に掘りこんでいる。

墳丘盛土については、東・北トレンチの土層断面において明瞭に確認することができた(第12・13図　東トレンチ2・3層、北トレンチ9・10層)。盛土は比較的大きな礫を多量に含むことから、古墳築造の際、整地時に生じた基盤層の排土を盛り上げたものと考えられる。なお土層の観察において版築等の工法は確認されていない。

墳丘の規模について、東西方向は墳丘西半部が不明確なため推定とならざるをえず、東トレンチで確認した盛土端部が中心から5.2mであることからその倍の約10.4mであったとみられる。南北方向は北トレンチで確認した端部から第1列石まで約8mを測り、東西約10.4m、南北約8mの規模の墳丘であったと推定される。

周溝については、北トレンチにおいて断面で観察される。上端については一部未掘ではあるが幅が約2.5m、下端の幅が約1mである。また、東トレンチでは立木のため未発掘部分があり断定はできないが、中心から北トレンチと同じ距離の位置で周溝の掘り方を確認できていないことから、周溝は墳丘北側の一部のみを巡っていたものと推察される。

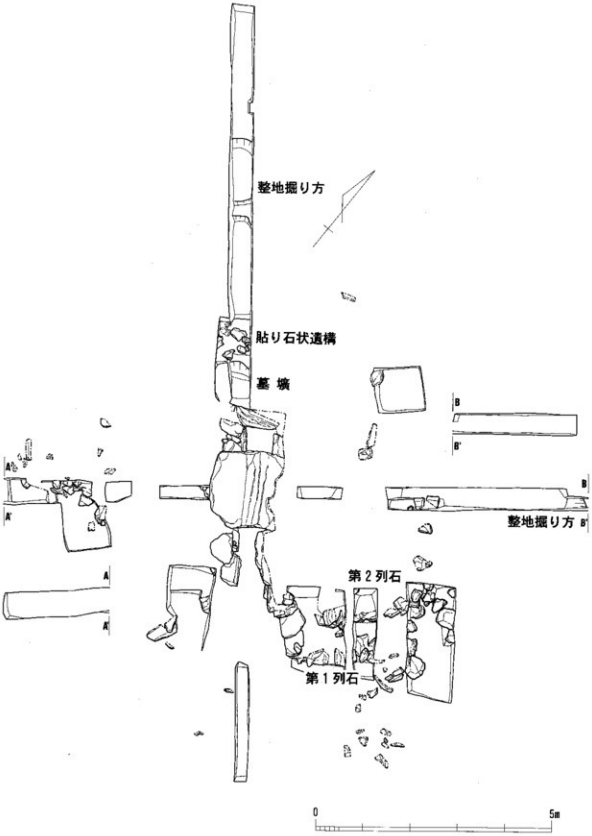
3　列　石(第14図)

南東各トレンチを中心に検出、観察をおこなった。5号墳の立地する斜面自体が南西方向に大きく傾斜しており、墳丘西半部は盛土、列石ともにほとんどが流失しているとみられる。そのため、列石についての所見は専ら墳丘東半部での検出状況および観察に基づく。

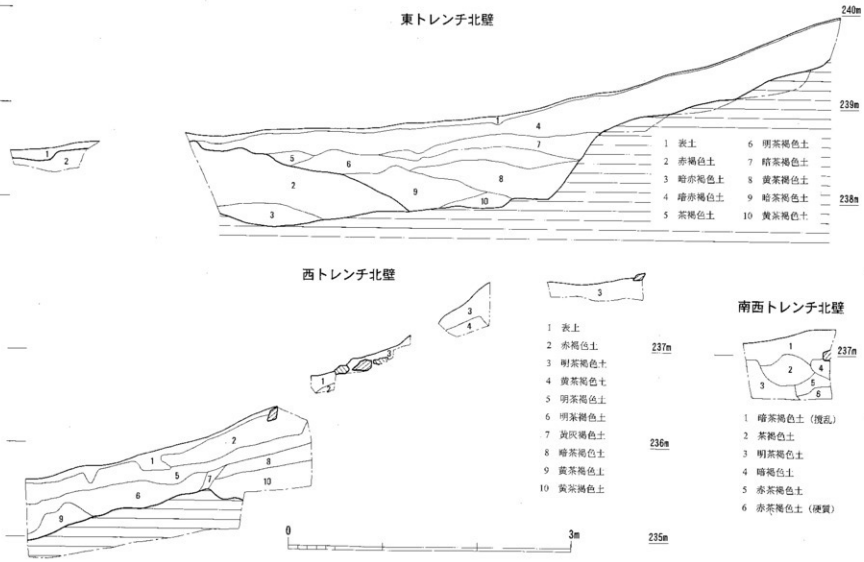
石室開口部から北東方向に列石が展開している。調査前からも現地表面上に一部露出していたことから、ある程度の様相は予測していた。

調査の結果、確実に把握できた列石は2列である。本墳の列石は、後世の撹乱等による散失等を勘案してみても概観してあまり精美なものとはいえない。

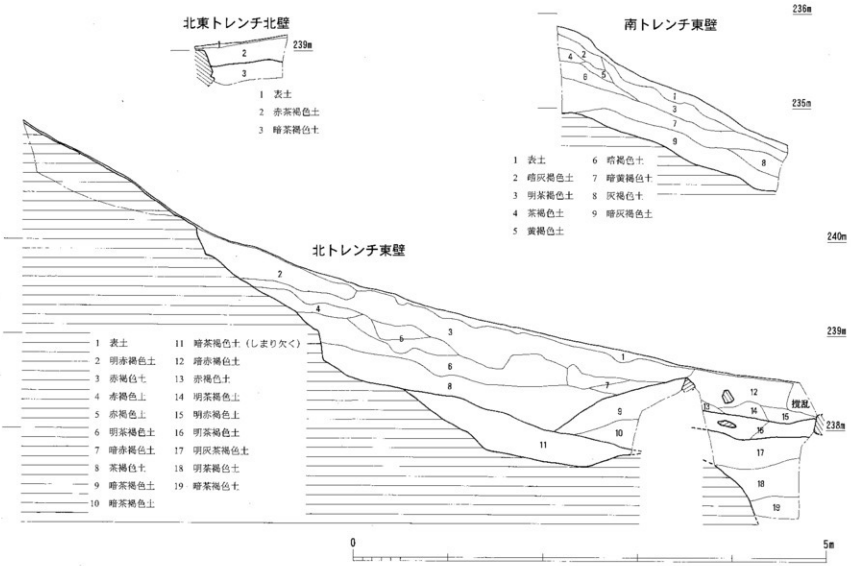
第1列石は1段に礫を配置して構成し、石室開口部の最先端から展開している。石材を基本的に長辺を縦方向にして配置しており、石室の主軸に対しやや後方気味に、直線的に伸びていく。現存長は約



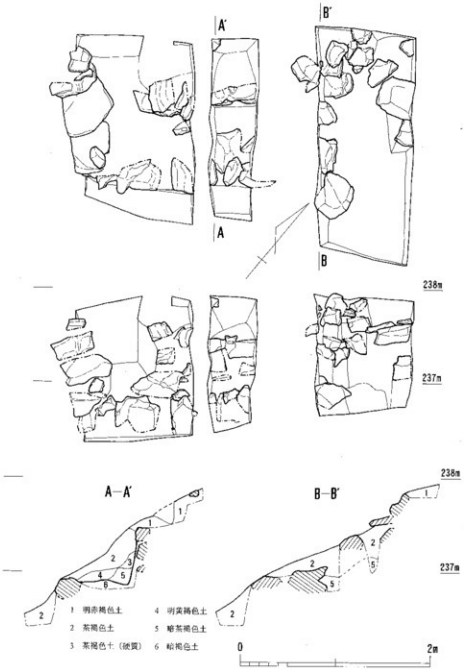
第11図　検出遺構図（1/80）



第12図　各トレンチ土層断面図(1)（1/40）



第13図　各トレンチ土層断面図（2）（1/40）



第14図　南東トレンチ列石平面図、立面図および断面図（1/40）

2.5mであるが、第2列石の南辺長と比較しても短いことから、東端部が流失していると思われる。

第2列石は、第1列石の約80cm後方の側壁から、若干後ろに広がるように展開している。基本的に石材を2段に組んでいる。側壁と間隙があるが、流失もしくは抜き取りによるためと考えられる。北東方向へ約4m展開し、そこから約108°の角度で北西方向に折れ曲がり、その延長線上で東トレンチにおいて検出した列石に達する。なお、第2列石の上方への連続性を捉える目的で、地表面に露出していた礫を絡める形で北東トレンチを設定し調査したが、連続性は確認されなかった。

土層断面を観察したところ、第2列石は基本的に盛土の上に築かれているが、前方の南辺部については一度盛った盛土を垂直に断ち落とし、そこに2～3段に石を積み上げ、その後２段目以下の石を埋

土により被覆した様子が観察できる。また、第1列石と第2列石の間は概ね直角のテラス状を成している。

北トレンチにおいては中心より約3m北西で、貼り石状を呈する礫の一群を検出した。層位的には墳丘盛土上にあることから、第2列石と同位関係にあるとみられる。厳密にはレヴェル的に若干、盛土に一部埋もれた状況であり、貼り石というよりは埋設されたというべきであるかもしれない。しかしながら、埋設のための掘り方等の痕跡は確認することができなかった。

以上、5号墳について現存で確認できる列石は2列である。しかし本墳は石室を覆う墳丘盛土が流失してしまっていること、そして現地表面上でも列石を構成していたとみられる礫が多数散在している状況がみられることからも、3列目以上が築かれていた可能性を念頭に置く必要があろう。

4　規模・形態および構築方法

各トレンチの調査所見から、定5号墳は墳丘規模が東西約10.4m、南北約8mの2列の列石が巡らされている方墳であることが判明した。正確な規模・墳丘形態については西半部の遺存状態がよくないこと、およびそれに伴い古墳の正確な中軸線を把握することが不可能なことから、あくまでも推定の域をでないものであることは前述のとおりである。岡山大学考古学研究室による略測調査の報文によると、墳丘規模が東西約9m、南北10m前後で2列の列石を有する方墳である、とされており、今回の調査によって若干の相違はあるものの、概ねそのことを確認することができた。

構築方法については、今回の調査自体が狭小なトレンチによるものであるため、制約された所見に基づく、限定的な再現とならざるをえない。

5号墳では東・北の両トレンチにおいて、古墳築造にあたり最初におこなわれる整地の痕跡が明瞭に確認されている。丘陵斜面を掘削し平坦面を作り出すと同時に、墓壙の掘り込みもおこなわれているようである。整地ののち、石室および第1列石を構築しているがその前後関係については把握できなかったため不明である。

墳丘構築のための盛土については、断面観察から2回にかけておこなわれたと考えられる。1回目は石室の構築に際して、墓壙と石室の間隙を埋土によって塞いだのちにおこない、それから石室の天井石を乗せたものと思われる。

天井石を設置し、石室が完成したのちに2回目の盛土を被せたようである。第2列石は2回目の盛土をおこない、それから築かれたものとみられる。列石は盛土表面に貼り付けもしくは埋設によりおこなわれている。

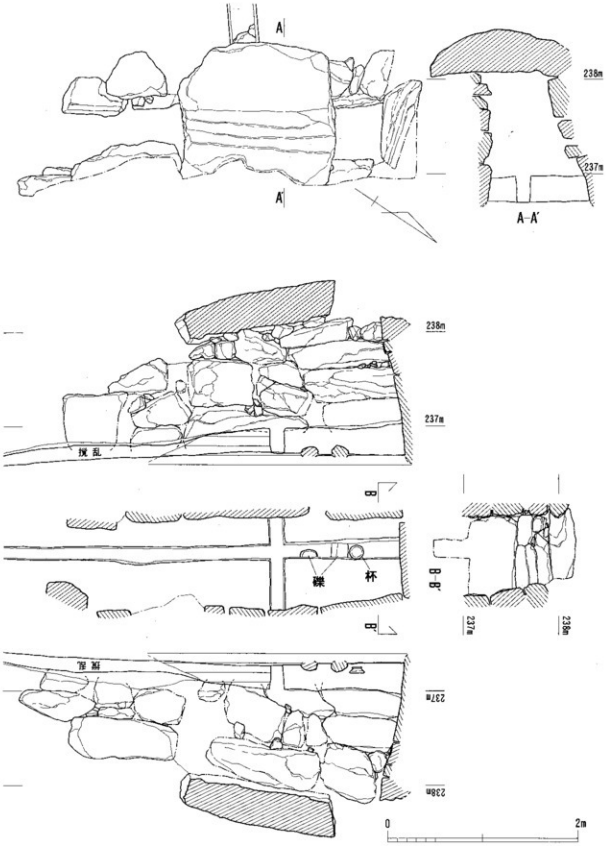
5　横穴式石室

石室の構造(第15図)

定5号墳の石室は、墳丘の南辺に開口する切石積みの横穴式石室である。石室全長は東壁沿いで4.1mを測り、主軸は真北でN34°Wをさす。石室開口部の前面に石室の一部とみられる石材が積み上げられており、過去の盗掘等の痕跡と思われる。石室開口部は、現状で1列目の列石前面となる。

袖については明確な形成がなされておらず、無袖式石室の可能性がある。

石材はいずれも精美なものではなく、厳密には奥壁の構成材に限り切石状と呼べる程度である。石材の組み合わせ方もやや粗雑であり、小形の礫を隙間に詰める手法も数ヶ所においてみられる。



第15図　石室実測図および遺物出土状況（1/40）

天井石は現状で1石が遺るのみであり、奥壁側に空隙があることから最低でももう1石が乗せられていたとみられる。現存の天井石は長さ160㎝、最大幅145㎝、最大厚40㎝を測り、上面は切り妻屋根状に加工された痕跡がうかがわれる。

(玄室)

袖が確認されていないため玄室と羨道の境が不明瞭であり、石室のすべてを玄室とみなして記述する。長さは東壁沿いで4.1m、最大幅1m、高さは奥壁沿いで1.5mを測る。

平面形はほぼ長方形であるが、東壁の奥壁付近のみ内寄りとなっている。奥壁、東壁はともに内傾するが、西壁はほぼ垂直である。

東壁　基本的に3段積みである。長さ60～120㎝、高さ30～60㎝程度の石材を用いているが、一部2段目の間隙をやや小形の石材で充填している。中間部(天井石先端の下位)は盗掘もしくは抜き取りによるためか、石材が欠落している。また前半部は付近に生えている樹木根の作用によるためか、オーバーハングして迫り出しており、本来の位置を保っていない。

西壁　東壁に対し4段積みを基本とする。石材の大きさは東壁のものとほぼ同じであるが、天井石直下(壁最上部)は、東壁が比較的大きな石材1枚で支えているのに対し、西壁は小形の石材で間隙を埋める形で固定している。

奥壁　奥壁は4段に積まれている。基底部と最上部は石室幅に相当する1石のみであるが、2・3段目の石材は若干幅が狭く、西側部の間隙を小形の石材で埋めるような形となっている。

床面　石室内には当初、後方上位、墳丘背面側からの流入土がかなり堆積していた。そのため、まず大方の流入土を排出し、その後床面の確認を目的とし幅10㎝(主軸方向の奥壁側のみ幅20㎝に拡張)のトレンチを十字に設定し、調査をおこなった。

開口部側は概して撹乱が著しい。奥壁側にてトレンチ設定面から約30㎝の深さにて後述の須恵器(杯身)および棺台と思われる礫を2点検出したことから、このレベルを床面と認定した。

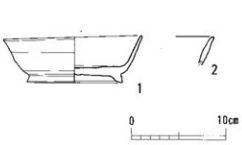
なお、床面には板石敷きはおこなわれていない。

6　出土遺物

須恵器(第16図)

いずれも石室内において出土した遺物である。1は完形の杯身で、石室内トレンチで検出した。口径14.7㎝、器高4.5～5.0㎝を測る。口縁部はわずかに外反し、水平ではなく若干傾斜している。端部はやや尖り気味となっている。底部は厚めに作られ、高台を有している。成形は内外面ともにロクロによる横なでとし、底部外面は反時計回りのヘラ切り痕を遺す。色調は青灰色を基本とし、胎土には径2～3㎜の砂粒がみられる。

2は口縁部片である。石室内流入土を排出中に出土した。小破片のため器種等の詳細については不明である。色調は白灰色で、胎土は微粒砂を含む。



第16図　出土須恵器 (1/4)

第4章　ま　と　め

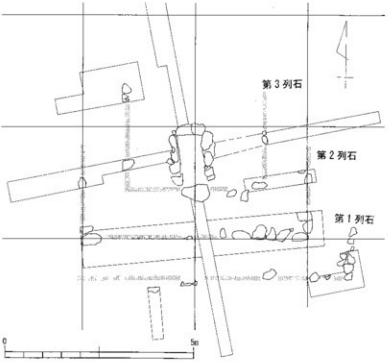
第1節　定4号墳の年代的位置づけ

今回の調査で定4号墳は、2列の外護列石を巡らせた東西約6m、南北約5.6mを測る方墳で、墳丘前面に1列の外護列石を巡らせた基壇状施設を附帯し、埋葬施設は長さ約1.3mを測る無袖の横穴式石室であることが判明した。

ここでは、「大谷・定古墳群」[1]に関する既往の調査成果および先行諸研究[2]を手掛かりに、墳丘および石室に関する調査成果から4号墳の年代的位置付けについて検討してみたい。

4号墳では墳丘前面に基壇状施設の存在が確認された。本古墳群では大谷1号墳および定東塚古墳も基壇状施設を有しており、前者は築造当初から基壇を築くのに対し、後者は大谷1号墳に基壇状施設が採用された影響を受けて後から新たに墳丘に付設されたとみられている。[3] 4号墳では基壇状施設を区画する第1列石の検出範囲が限られるが、両古墳の基壇状施設が2段で構成されるのに対し、1段にとどまり、使用石材も小形である。

墳丘の規模は、本古墳群を構成する他の方墳と比べ著しく小型である。また、列石は墳丘を全周せずコの字状を呈する、旧地形の整形により墳丘の大部分を築造する、周溝を持たない、など墳丘の構造も他の古墳に比して簡略である。一方で、墳丘は主軸を真北とし、7世紀中葉以降墳丘の築造規格に唐大尺（1尺29.7cm）が導入されていたとすれば、[4]第2列石南辺（5.97m）は20.1尺となり、想定される石室開口部から第3列石の南辺両端までの距離(約1.5m)は5尺となる（第17図）。また、各列石の東南角は石室奥壁付近で墳丘主軸と交差するように直線上に並んでおり、その在り方は大谷1号墳に類似する。このように規模も小さく簡略な構造で築造されるのに反し、築造規格においては方位を基準とし唐大尺を用いた厳密な設計がなされていた可能性を指摘できる。



第17図　定4号墳の築造規格案(1/100)
（方眼1マス＝唐大尺10尺：297cm）

横穴式石室は、N5°Eと概ね真南に開口する。無袖の石室は極めて小型であり、玄室と羨道の区別がない単一の埋葬空間と考えた場合、横口式石郭に類似する構造といえる。また、開口部では閉塞石の存在を確認できたが、大谷1号墳でも扉石による石室の閉塞が想定されている。こうした要素から、石室の縮小化および袖部の不明瞭化、閉塞石の採用といった本

古墳群での石室の変遷過程[5]の中で4号墳を捉えることができる。

以上、墳丘前面の基壇状施設、墳丘の規模および築造規格、石室の3点から本古墳群における4号墳の位置付けを検討してみた。いずれの点においても、大谷1号墳と同時期である7世紀後葉、あるいはそれ以降に築造されたものと位置づけることができる。さらに、大谷1号墳では墳丘および石室の主軸が真北よりやや西に振れるのに対し、4号墳の墳丘は真北を主軸とし、石室も概ね真北を主軸とするという相違点がある。7世紀後半には真北に従う古墳が増えており、その背景となる7世紀を通じて整備普及された厳密な方位に従う技術体系[6]が、4号墳では大谷1号墳以上に適用されたと評価できる。副葬品等築造年代の指標となる十分な資料を欠くが、前述した3点に関しても、大谷1号墳に比べると形骸・縮小化した点が強く看取される。この点を積極的に評価すれば、大谷1号墳の影響を受けるかたちで、7世紀末以降に築造された可能性がより高い。小型の石室を火葬による被葬者の埋葬に伴うものと仮定するならば、築造時期が8世紀代まで下る可能性も想起される。

第2節　定5号墳の年代的位置づけ

5号墳については調査の結果、墳丘規模が東西約10.4m、南北約8mの2列の列石が巡らされた方墳であると考えられる。残念ながら西半部の墳丘、列石がともに遺存状態が劣悪であり、正確な規模・墳丘形態を把握することが不可能であったことは前章において言及したところである。制約された条件のもとではあるが、5号墳の歴史的な位置づけについて考えてみたい。

築造規格、石室の形態について　5号墳は正確な全形が不明であり、そのため築造規格も不鮮明である。従来、大谷1号墳や定北古墳でおこなわれてきた唐大尺・高麗尺等に基づく築造規格の検討[7]を、定5号墳についても試みてみた。様相が比較的明確である墳丘東半部の列石に限定しての検討作業をおこなったが、本墳の平面形態に関しては唐大尺、高麗尺いずれの規格にも整合する様相はない。また、列石の配置についても、前面の南辺部については第1列石、第2列石ともに石室の主軸に対しやや後方気味に展開し、第2列石の東辺部についても石室主軸に対し若干北東方向に振れる形となっている。このことは大谷1号墳や定北古墳など当地域の他の終末期古墳の列石のあり方と大きく異なっており、定5号墳が全く独自の規格により構築されたものであると見ざるをえない。

横穴式石室の形態について若干触れておきたい。天井石は単なる板状の自然石ではなく、切妻屋根状に加工されている。これは山陰地方の横穴墓石棺によくみられる形態との共通性が強く、5号墳の築造された背景に山陰地方との何らかの関係、影響等が窺われよう。

年代について　5号墳では石室から須恵器が出土しており、そのため比較的正確な構築年代の推定が可能である。

出土した須恵器は2点で、うち1点は完形の杯身である。既往研究の成果[8]との比較検討から、この須恵器の年代は寒風二式に並行する、7世紀末頃の所産とみられる。

立地について、5号墳のみ定古墳群の他墳と異なるあり方を示し、尾根筋上ではなく南西方向に傾斜する斜面上に構築されている。このことは、丘陵頂部付近の南向き斜面に立地する大谷1号墳と相似しており[9]、立地選定という要素から5号墳の構築時期は大谷1号墳のそれと極めて近いものと考えられる。

以上のことから、定5号墳の築造は7世紀末と考えられる。

第３節「大谷・定古墳群」における定4・5号墳の歴史的位置づけ

7世紀を通じて中津井地域に築かれた6基の方墳からなる「大谷・定古墳群」は、大谷1号墳を端緒として、定北古墳、定東塚・西塚古墳と順次発掘調査が行われた。その都度もたらされた多くの知見は、古墳群はもとより7世紀代の北房地域の特異性をも際立たせる結果となった。さらに今回の調査で、7世紀後葉に築造された大谷1号墳に後続して、定4・5号墳が築かれたことが有力となり、本古墳群の形成過程を概ね把握することができた。

大谷1号墳を調査した平井勝氏は、定東塚・西塚古墳、定北古墳および定4・5号墳を一連の首長墓系列として捉え、やや離れた位置に単独で築造された大谷1号墳は、前者と構造的な系譜関係を有するものの、その被葬者は1代限りの相当有力な高位・高官であったとみなした。[10]

定5号墳は、前節で指摘したように大谷1号墳と古墳の立地が類似する。中津井川の東側丘陵の最奥に定東塚・西塚古墳、定北古墳に後続して定5号墳が築かれ、西側丘陵の谷奥に単独で大谷1号墳が築かれたならば、両古墳を比較すると、県内でも類を見ない5段の方墳に精美な切石積みの石室を有す大谷1号墳の特異性があらためて浮彫りにされることとなる。

一方、定4号墳は、大谷1号墳で頂点に達した本古墳群の造営活動の終末として捉えることができる。先に述べたとおり、4号墳の墳丘や石室の構造には大谷1号墳の影響が色濃く認められるが、大谷1号墳との質的な隔絶は明瞭である。4号墳の築造時期として想定した7世紀末以降には、英賀廃寺や英賀郡衙と推定される小殿遺跡が上水田地域にすでに存在している。英賀廃寺の寺院配置および小殿遺跡で検出された建物跡はともに主軸がほぼ真北を採り、真北を墳丘主軸とする4号墳と方位の採用に関して共通点を見出すことも可能である。その反面、一律に比較するのには問題があるかもしれないが、英賀廃寺の塔基壇は1辺15.6mを測り、4号墳の墳丘規模を大きく上回る。想像をたくましくすれば、本古墳群を築き隆盛を誇った勢力が、これら官衙や寺院の建設にも関わり、古墳に変わる新たな社会装置として力を傾注していたと考えることもできる。

新納泉氏は、7世紀代に中津井地域の勢力が大いに力を伸ばした背景に、6世紀後半以降、北房地域は鉄生産の発達および吉備中心部の近接地、交通の要衝といった立地条件から蘇我氏など畿内中心部との結びつきを急速に深めたことを挙げている。[11] この前段階からの結びつきを発展させるかたちで、畿内中心部の豪族をはじめとする様々な地域、勢力と重層的に深く関わることにより、北房地域では他地域に類をみないような終末期古墳の造営活動が継続できたものとみられる。元来美作地域との結びつきが強いこの地域が、吉備分国にあたって備中国に属することとなり、英賀廃寺が備中北部で唯一確認されている古代寺院であることも、7世紀の汎列島規模にわたる動向の中においてこの地域が果たした政治的重要性と無関係ではないだろう。古墳の築造がほとんど停止し、古代寺院が建立された7世紀末以降においてなお、定東塚古墳から続く段構造の方墳と列石構築の伝統を受け継ぐかたちで定4・5号墳が築造された点は、この特異な古墳群を築いた勢力が長期間にわたり保持し続けた政治的役割がいかに重要であったかを物語るのかもしれない。

註

(1)大谷1号墳と定古墳群は中津井川を挟んだ両側の丘陵に別々に所在し、地理的な観点からの古墳群としての一体性には欠けるが、その歴史的一体性を重視し、本稿では両者をあわせ「大谷・定古墳群」として取り扱うこととする。

(2)具体的には、下記の報告書における調査報告および所収された論考を中心とする。

ア)新納　泉・尾上元規編『定北古墳』 岡山大学考古学研究室　1995年

イ)近藤義郎・河本　清編「岡山県指定史跡 大谷一号墳」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』7 北房町教育委員会　1998年

ウ)新納　泉・光本　順編『定東塚・西塚古墳』 岡山大学考古学研究室　2001年

(3)野崎貴博「第6章 考察　2 定東塚・西塚古墳の墳丘をめぐる諸問題」 註(2)-ウに所収

(4)尾上元規「第4章 考察　1 終末期方墳の築造規格と変遷」　註(2)-アに所収

(5)濱　隆造「第6章 考察　3 横穴式石室の比較と地域における変遷」　註(2)-ウに所収

(6)新納　泉「結語」 註(2)-アに所収

(7)桑田俊明「第4章 論説　(1)墳丘論」註(2)-イに所収

尾上元規「第4章 考察　1 終末期方墳の築造規格と変遷」註(2)-アに所収

(8)山本悦世・土井基司・田代健二「集成12須恵器」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社　1992年

山本悦世「寒風古窯址群―須恵器から備前焼の誕生へ―」『吉備考古ライブラリィ⑦』吉備人出版　2002年

(9)この点については、平井　勝氏も指摘されている。

平井　勝「第4章 論説　(5)被葬者について」　註(2)-イに所収

(10)註(9)文献

(11)註(7)文献

新納　泉「第6章 11 定東塚・西塚古墳の歴史的位置」 註(2)-ウに所収

報告書抄録

ふりがな	さだよん・ごごうふんかくにんちょうさほうこく
書名	定4・5号墳確認調査報告
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	真庭市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	池上　博、坂田　崇、新谷　俊典
編集・発行機関	真庭市教育委員会
所在地	〒719-3144　岡山県真庭市落合垂水1901番地5　℡ 0867-52-1180
発行年月日	2007（平成19）年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
定4号墳（さだよんごうふん）	岡山県（おかやまけん） 真庭市（まにわし） 上中津井（かみなかつい） 70番地1	33	522 243	34° 94′ 27″	133° 63′ 15″	20060619 ～ 20060928	18.5㎡	保存を目的とする確認調査
定5号墳（さだごごうふん）	岡山県（おかやまけん） 真庭市（まにわし） 上中津井（かみなかつい） 35番地	214	522 244	34° 94′ 32″	133° 63′ 7″		21.6㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
定4号墳	古墳	飛鳥～奈良時代	横穴式石室 列石	鉄製品	
定5号墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室 列石 周溝	須恵器	

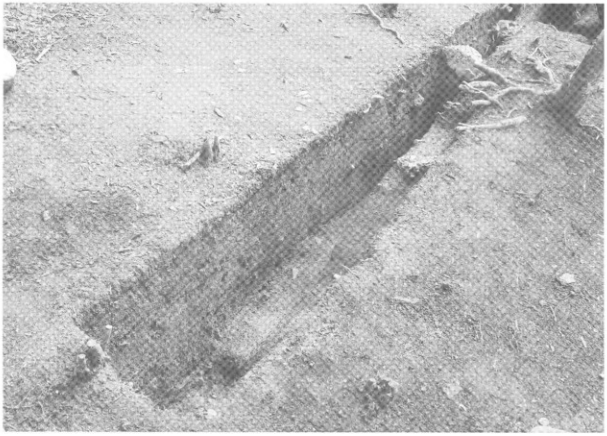
1　定4・5号墳所在地遠景（西から）

2　4号墳調査前状況（南から）

図版2

1　調査後全景（南から）

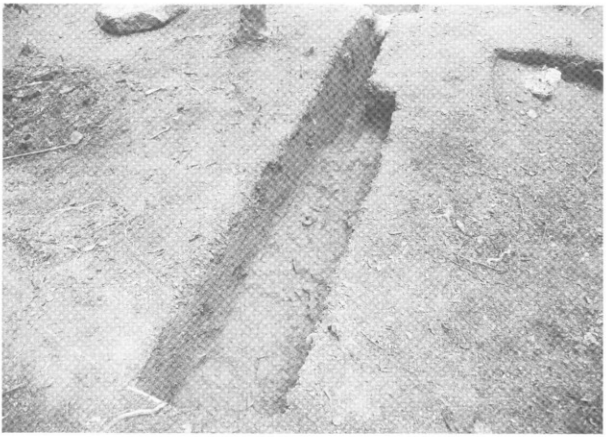
2　前面トレンチ（西側）列石検出状況（南から）



1　西トレンチ列石検出状況（南西から）

2　南西隅トレンチ列石検出状況（東から）

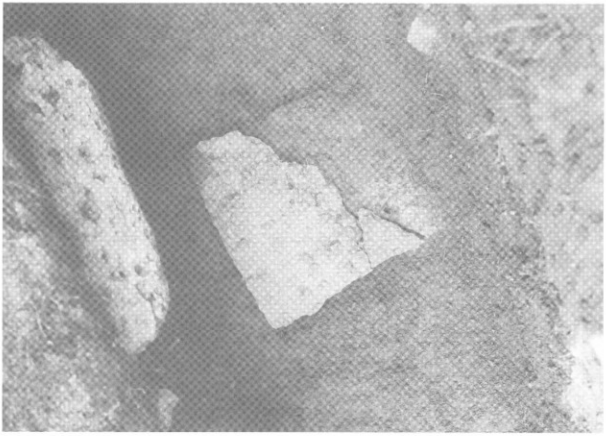
図版4



1　北トレンチ(北西から)

2　石室調査前全景(南から)

1　石室調査後全景(南から)



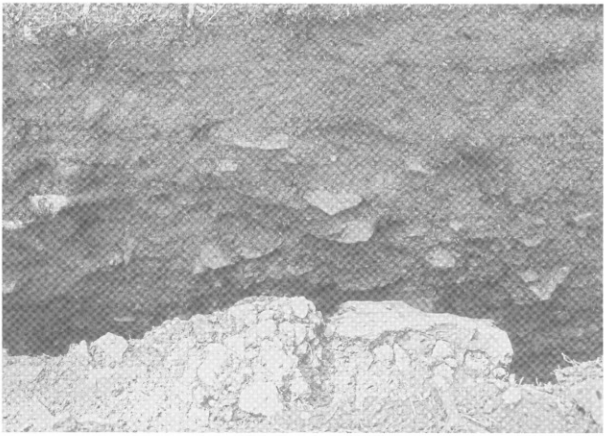
2　鉄製品出土状況(南から)

図版6

1　5号墳調査前状況（南から）

2　調査後全景（南から）

1　北トレンチ(南から)



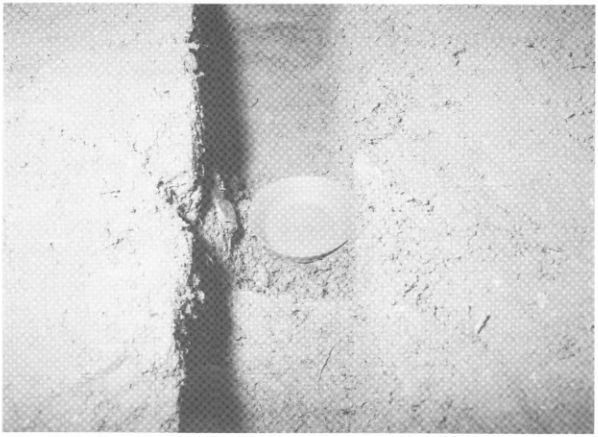
2　東トレンチ北壁墳丘盛土断面(南から)

図版8

1　南東トレンチ列石検出状況（南から）

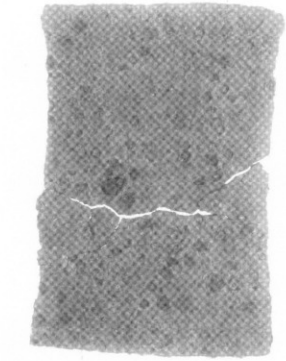
2　南東トレンチ列石検出状況（東から）

1　石室全景(南から)



2　石室内須恵器出土状況(南から)

図版10



1　4号墳出土鉄製品

2　5号墳出土須恵器

真庭市埋蔵文化財調査報告1

定4・5号墳確認調査報告

平成19年3月25日　印刷
平成19年3月31日　発行

編集・発行　真庭市教育委員会
印　　刷　真庭印刷工業株式会社